

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：32510

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720149

研究課題名（和文）現代朝鮮語の文末形態に関する研究

研究課題名（英文）A study of sentence-ending forms in Modern Korean

研究代表者

平 香織（TAIRA KAORI）

神田外語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40389614

研究成果の概要（和文）：本研究は現代朝鮮語の終結語尾のうち話しことばで主に使用される略待上称・半言に属する形態に着目し、それらの談話的機能について考察した。特に、叙述形の‘e(yo)’, ‘ney(yo)’, ‘ci(yo)’, ‘ketun(yo)’について、発話に至るまでの過程と各形態の用法を基にした独自の分類を試みた。また、話しことばで使用される終結語尾という点から、下称叙述形の‘ta’の談話的機能についての考察を行った。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the discourse functions of polite style and intimate style sentence-ending forms in Modern Korean. We selected ‘e(yo)’, ‘ney(yo)’, ‘ci(yo)’, and ‘ketun(yo)’ from among the polite style and intimate style sentence-ending forms, and attempted to classify these forms on the basis of our individual indexes and each usage of the forms. In addition, we investigated the discourse function of the plain style sentence ending form ‘ta’.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：朝鮮語・終結語尾・話しことば・談話、語用論的機能

## 1. 研究開始当初の背景

朝鮮語には文末に生起する「終結語尾」と呼ばれる一群の形態が存在する。終結語尾はその名の通り、文を終結させる機能を果たすが、その他に、待遇法の表示と文の種類（叙述・疑問・命令・勧誘）を表示するという機能を併せ持つ。

## (1) Chelswu-ka uyca-ey

人名-主格 椅子-に

anc- $\{$ nunta / ney / so / a / ayo / supnita $\}$ .  
座る- $\{$ 下称/等称/中称/半言/略待上称/上称 $\}$ 

例文(1)の括弧内の形態は、下称・等称・中称・半言・略待上称・上称という待遇レベルに属する叙述形の代表的な終結語尾である。本研究では数ある終結語尾のうち、待遇法の分類で「半言」とされる形態を考察対象とした。

半言は、非格式体の非丁寧体であり、主に

話しことばで使用される。また、半言の多くの形態は‘yo’を付加することで略待上称（非格式体・丁寧体）形を作ることができる。既存の研究を見ると、半言に属する形態群は、しばしば「話し手の心的態度を表す」という特徴づけがなされてきた。しかし、これは非常に漠然とした特徴づけである。先に終結語尾は3つの機能を果たすことを述べたが、そのうちの待遇法の表示も丁寧体・非丁寧体の使用という話し手の判断が関わってくるため、一種の「話し手の心的態度」の現れと捉えることができる。つまり、終結語尾を選択して表現する以上、半言に関わらずどの終結語尾にも丁寧体・非丁寧体の選択は反映されることになる。普通、文や発話は何らかの話し手の心的態度を表しており、話し手の心的態度が全く現れない文章・発話は存在しないと言ふべきだろう。では、半言が表す「話し手の心的態度」とは具体的にどのようなものなのか。本研究では、それを探るため、半言に属する形態が持つ「文脈的意味」と「談話・語用論的機能」を区別して記述する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、半言の終結語尾がどのような文脈的意味を持ち、どのような談話・語用論的機能を果たすかについて明らかにするところにある。特に、話しことばで使用されるという点を重視すると、各形態の談話・語用論的機能を明らかにすることが必要である。

## 3. 研究の方法

本研究を遂行するための方法は以下のとおりである。

### (1) 半言に属する形態群の中から考察対象とする形態を選択

本研究では形態同士が似通った機能を持ち、ある状況では置き換えが可能である叙述形‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’と意志形‘lkey’、‘llay’に着目した。

### (2) ‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’と分析的な形式の共起制約

日本語の文末形式では文の階層構造を認め、命題近くに生起するもの（「だろう」「らしい」「ようだ」など）と、文末に生起するもの（「ね」「よ」など）に分け、前者を「命題めあて」、後者を「聞き手めあて」とする主張がある（益岡 1991, 仁田 1991）。日本語の場合、「だろうね（よ）」、「ようだよ（ね）」のように「命題めあて」と呼ばれる形態と「聞き手めあて」と呼ばれる形態の間に共起制約がほとんど見られない。一方、統語構造上、高い類似性を見せる朝鮮語に文の階層構造

を当てはめてみると、「命題めあて」には「連体形 kes kathhta’「～ようだ」、‘-lci moluta’「～かもしれない」といった分析的な形式が相当し、「聞き手めあて」には終結語尾が相当する。これまでの研究において朝鮮語の分析的な形式と終結語尾との間の共起制約に言及した研究はほとんど見当たらない。そこで、分析的な形式と‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’との間で共起制約が見られるかを観察した。その上で、朝鮮語に日本語のような意味的な階層構造が認められるか、特に‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’が聞き手に働きかける「聞き手めあて」と呼ぶことのできる一群であるかを考察した。

### (3) 文脈的意味の把握・整理

先行研究では、‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’について文脈的意味と談話・語用論的機能とを区別せずに記述しているものがある。そこで本研究では、まず各形態が本来持っている文脈的意味を整理・把握した。

### (4) 談話・語用論的機能の考察

(3)の観察を踏まえた上で、各形態が持つ談話・語用論的機能について考察した。形態によっては、談話・語用論的機能が見出せないものもあると予測した。そのような形態は(3)の意味だけを持つ形態として分類が可能である。この観察により、談話としての役割が高い形態、低い形態の分類が可能となる。

### (5) 自然会話の収集

申請者はこれまで主にシナリオをデータとして各形態の意味・機能を考察してきた。シナリオなどに現れる会話を「疑似会話体」、「準口語体」と呼び、自然会話とは区別することがある。談話・語用論的機能を明らかにする研究では自然会話をデータとした方がよいという主張は妥当である。

しかし、多様な人間関係、多様な場面を数多く観察するという点では、疑似会話体・準口語体も有益な資料となり得る。本研究では‘e’、‘ney’、‘ci’、‘ketun’、及び‘lkey’、‘llay’に関する考察ではデータの量と多様性を重視し、シナリオを使用した。また、下称叙述形‘-ta’に関する考察にはシナリオの他に「21世紀世宗コーパス」の会話資料を併せて使用した。

自然会話の収集も継続して行ってきたが、本研究では収集した自然会話をデータとして活かすことができなかった。その理由は、自然会話と言っても、ただ座って話すような内容では、形態によってはほとんど出現しないものがあつたためである。この点については、研究年度の後半部分で動きを伴った自然会話の収集を試みた。

#### 4. 研究成果

1 年目は、分析的な形式と‘e’, ‘ney’, ‘ci’, ‘ketun’の共起制約について観察した。朝鮮語には「命題めあて」に属する形式がいくつか存在する。そのうち、‘na pota’「～らしい、～みたい」は叙述形‘ci’と共起できるのに対し、‘l kesita’, 連体形 kes kathhta’は共起できないことが明らかとなった。この観察は、「文末に見る話し手の心的態度の違い—韓国語の終結語尾(半言)と日本語の終助詞を対象として—」の中で触れた。なぜこのような共起制約が見られるのか、分析的な形式が持つ特徴のためか、叙述形‘ci’が持つ特徴のためか、詳細な考察は今後の課題である。

次に、終結語尾‘e’, ‘ney’, ‘ci’, ‘ketun’の機能の違いを考察するために、発話に至るまでの過程と各形態の用法を基にした独自の分類を試みた。分類の基準は、話し手が発話しようとする内容が「発話時に得た情報」か「発話時以前に得た情報」か、「聞き手への伝達意図」の有無、そして「伝達意図有」の場合にはその情報が聞き手に「属するか否か」に分けた。「発話時以前に得た情報」も「聞き手への伝達意図」の有無によって分け、「伝達意図有」には聞き手に情報が「有ると想定」「無いと想定」「考慮せず」の3つを設けた。これにより、これまで類似した機能を有するとされてきた形態の分類が一部可能となった。この観察は、日本言語学会第138回大会で発表した。

2 年目前半は、「終止形 I-ketun(yo), I-ney(yo), II-lkey(yo), II-llay(yo)はいかに働くか」(印刷中)において、主に各形態の談話・語用論的機能について執筆した。意志形‘lkey’, ‘llay’に関する概略を以下に示す。

‘lkey’は叙述形しか持たない形態であり、「約束を表す」と特徴づけられることが多い。その中で Han Kil(2004)は、‘lkey’が必ずしも約束を表すのではなく、告知の意味もあることを指摘している。そして、約束の意味として理解される場合には、話し手の今後の行為が聞き手に利益となる場合に使用され、告知の意味として理解される場合には、話し手の今後の行為が聞き手に利益となるかどうかは判別できなくなるという語用論上の特性を持っていると主張している。‘lkey’については例文を検証しつつ、Han Kil(2004)の主張を踏襲した。

一方、‘llay’は叙述形だけでなく疑問形も有する。意向を表す形態として分類されることもあり、次のような対話でも使用される。

(2) A: Mwe masi-llay-yo?

何 飲む-llay-yo(略待上称:疑問)?

「何を飲みますか。」

B: Kephi masi-llay-yo.

コーヒー 飲む llay-yo(略待上称:叙述)

「コーヒーを飲みます。」

(韓国語文化研修部 編 2000:132)

例文(2)のAでは、何を飲むかを聞き手に尋ねる場合に疑問形‘llay’が使用され、Bでは、問われた意向に対する答えとして叙述形‘llay’が使用されている。問われた意向に対する答えとして用いる叙述形‘llay’は、単に話し手の意志を表すものであり、その意志を聞き手が受け入れるかどうかという点で中立的である。しかし、意向を問われる場面でない場合に使用される叙述形‘llay’は、聞き手が望まない行為を行う意志の表明に使用される。

(3) A:tuleka-se yaykiha-ca.

入る-連結語尾 話す-下称(勧誘)

「中に入って話そう。」

B: silh-e cip-ey {ka-llay / \*ka-lkey}.

嫌だ-半言 家-に 帰る-半言(意志)

「嫌、家に帰る。」

このように、意志を表す‘lkey’, ‘llay’は聞き手がその意志を受け入れるかどうかを話し手が考慮した結果、使用される形態と言える。

以上の‘e’, ‘ney’, ‘ci’, ‘ketun’, ‘lkey’, ‘llay’に関する考察内容の一部は『韓国語入門 II』の半言及び略待上称に関わる記述に活かされている。

2 年目後半から3 年目は、待遇法において最も低いレベルとされる下称の叙述形終結語尾‘ta’について考察した。‘ta’は書きことばだけでなく、話しことばでも使用されるが、話しことばで使用される‘ta’に関する既存の研究では、年齢・社会的地位において話し手よりも下の者に対して、あるいは親密度の高い間柄で使用されることが指摘されているのみで、詳しい考察はほとんどない。

考察にはシナリオの他に「21 世紀世宗コーパス」の話しことば資料を使用した。‘ta’が使用された発話を観察し、機能・用法別に「叙述」「瞬間的な発話」「意志の表明」に分類し、これらの談話的機能について考察した。概略は以下のとおりである。

「叙述」で使用される‘ta’は、上昇イントネーションで発話することで、同一の話し手が関連した内容を継続して発話することを聞き手に予告する談話的機能が見られることを指摘した。「瞬間的な発話」に使用される‘ta’は、話し手が視覚・聴覚を通して発話直前あるいは発話時に認知した事態を述べる時、また発話時における話し手の内的状態を発話する時に使用される。視覚・聴覚を通して認知した事態を発話する時に使用される‘ta’は、話し手が見たまま、聞いたままを描写するという特徴が観察でき、これは日本

語で指摘されている眼前描写と類似している。最後に「意志の表明」に使用される‘-ta’は、一方的で宣言的な意志を表し、話し手と聞き手の相互的な対話では使用が難しいことを指摘した。上記の内容は『韓国語学 52』に投稿し、掲載された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 平香織 (印刷中) 「終止形 I-ketun(yo), I-ney(yo), II-lkey(yo), II-llyay(yo)はいかに働くか」野間秀樹編著『韓国語教育論講座 2』くろしお出版. 査読無

② 平香織 (2011) 「話しことばに現れる‘-ta’の談話機能について」(原文韓国語)『韓国語学 52』 p.273-p.294. 査読有

③ 平香織 (2009) 「文末に見る話し手の心的態度の違い—韓国語の終結語尾(半言)と日本語の終助詞を対象として—」東北大学言語認知総合科学 COE 論文集刊行委員会編『言語・脳・認知科学と外国語習得』 p.65- p.77. ひつじ書房. 査読無

[学会発表] (計 1 件)

① 平香織 「韓国語の半言と日本語の終助詞の類似点・相違点の提示—半言の用法分類からの試み—」『日本言語学会第 138 回大会予稿集』日本言語学会. p.124- p.129. 2009 年 6 月 20 日. 於 神田外語大学.

[図書] (計 1 件)

① 平香織 放送大学教育振興会.『韓国語入門 II (12)』 2012 年. 全 187 頁.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

平 香織 (TAIRA KAORI)

神田外語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40389614